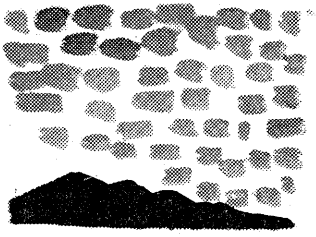

幼児の四季

秋

上沢謙二

「この路や行く人もなき秋の暮」と、俳聖芭蕉はよんだ。

「心なき身にもあわれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮」と、歌人西行は詠じた。

幽玄閑寂。「わび」と「さび」は、秋の心とされる。

けれども、幼児はそうではない。

行く人のない路が長くつづけば、きゃっきゃっと、争って走りだすだろう。ふと、鴫が飛びだせば、「わあっ」と声をあげて、手をたたくだろう。

どんな時でも積極的、何に対しても興味を感ずるのが、幼児の常であり、それが彼らの特色でもあり特権でもある。

秋に凋落を感じ、淋しさを味わうのは、おとなの心である。子どもの心は、反対に、豊熟を感じ、賑やかさを味わう。見よ、野には、七草がゆらいて、虫たちは音楽会を開き、畑には、稲が黄金の波を打って、蝗がとび交

うているではないか。仰げば頭の上の木には、栗がイガから笑いだしており、堀れば足もとの土の中から、芋がごろごろと出てくるではないか。町の店先には、柿が赤く、蜜柑が黄色に、葡萄が紫に、並べられ重なり合っているではないか。子どもたちの目は光り、手はうごき、舌はぴちぴちと鳴らないではいられない。

アメリカの幼児ばなしの名だたる作家リンゼーの作品に「よいおしらせ」というのがある。大要はこうである。

「ある朝、ベンが表からかけてきて、兄さんのフレッドに大声でいった。『いいこと、いいこと！ むこうの森の中にね、いっぱい、なつめがなっているし、野葡萄がぶらさがっているし、栗がおちているよう』『それはいいな、取りにいこう』と、フレッドはすぐ答えたがつけ足した。『従妹のスウも連れていってやろう』。そうして二人でスウのところへくると、大声でいった。『おうい、いいこと、いいこと！ むこうの森の中にね、いっぱい、なつめがなっているし、野葡萄がぶらさがっているし、栗がおちているよう』『それはいいね、取りにいこう』と、スウはすぐ答えたがつけ足した。『おとなりのダンも連れていってやろう』。そうして三人でダンのところへきて、大声でいうと『それはいいね、取りにいこう』と、すぐ答えたダンはつけ足した。『仲よしのナンも連れていってやろう』。そうして四人でナンのところへきて、大声でいうと『それはいいね、取りにいこう』と、ナンはすぐ答えた。それで、五人は手をつないで、にこにこしながら森の方へあるいていった。それはほんとうに『よいお知らせ』だった。」

まさに、秋の心と子どもの心がぴったり合っているような場面である。

春は「解放」の時、夏は「開放」の時といったが、秋は「透徹」の時である。すべてがすっきりし、はっきりする。だから、奥にまで透り、底にまで徹するのである。

春の山は霞がほのかにたなびくが、秋の山は道路の限りすっきりとひらけて、さえぎるものもない。夏の空は雲が低くかかるが、秋の空は高く晴れて、昼は蒼い奥まで見えるし、夜は、天の川まではっきりあらわれる。だから、観察の好季である。殊に遠いものに対する観察、ひろいところに対する観察の好季である。

幼児と共に庭に立って、つくづくと遠い空に見入るがよい。幼児といっしょに小山に登って、しげしげと広い景色を眺めるがよい。きっと珍しい何かに接し、新しい何かを見出だすだろう。

イギリスの短篇童話のすぐれた作家ファイルマンの作品に「お山の上で」というのがある。大要はこうである。

「坊やとおとうさんと、町のうしろの小山へのぼった。ずっと下に、家が並んで見える。『おとうさん、いっぱい、棒が立っているね』『ああ、あれは煙突というものだよ』『煙が出ているね』『あの下のおうちでね、よそのおじさんや、おばさんや、おにいさんや、おねえさんがはたらいているんだよ』『なにしているの』『ほら、坊やが、けさ、飲んだ牛乳や、着ている服や、あそぶおもちゃをつくっているのだよ』『ふうん』。坊やはじっと、煙突を見つめた。その時、音がきこえてきた。ゴーンゴーン……。『おとうさん、あれ、なんの音？』『あれはね、教会で鳴らしている鐘の音だよ』。ガーンガーン……『あっ、べつな音がする』『あれは遠くの教会で鳴らしている鐘の音だよ』。カーンカーン……。『あっ、べつな音がする』『あれはずうっと遠くの教会で鳴らしている鐘の音だよ』『ふうん』。坊やはじっと、その音に聞き入った。」

ここにおのずからなる感興が湧く。おのずからなる観察が生ずる。おのずからなる学習がおこなわれる。

春のあたたかさののんびりにくらべて、夏の暑さのうんざりにくらべて、秋の涼しさはきりっとさせる。身も心もひきしまる。さわやかな朝。手足を伸ばせば、力が充ち満ちてくるような気がする。おとなでもそうだもの。はげしい発達途上にある子どもが、叫びたくなり、とびたくなり走りたくなるのは当然だ。

アメリカの教育的な幼児童話の作者で編集者であるベーレーの作品に「仲よし競争」というのがある。大要はこうである。

「ジョンは大きくなった。叫びたくて、とびたくて、走りたくてたまらない。のどの奥が、足の先がむずむずする。けれども、家の人は相手になってくれない。それで牛さんのところへいって『うわぁ、うわぁ！』と叫ぶと、牛さんも『もう、もう』。仲よしになる。それから兎さんのところへいって、ぽんぽんとぶと、兎さんもぴょんぴょんはねる。仲よしになる。それから犬さんのところへいって、とっとっと走ると、犬さんもたったっとかける。仲よしになる。そうしておたがいに勝ったり負けたり、元気になったりがっかりしたり、笑ったり泣いたり。仲よし競争はつらいけれどもおもしろい。たいへんだけれどもやめられない。

ちょうどこういう時に運動会が催されるのだ。協同的に——同じ年頃の友だちといっしょに。組織的に——一定のプログラムによって。社会的に——みんなが見物している前で。

自然は一種のカリキュラムをもっているようだ。そうしてきわめて気長に、間接に、おのずから施しているように見える。春はのびのびと出発させて、その調子を更に進めて、夏は思うままに親しませ、その気持の上に立って、秋はしっかりと力を出させる。

これこそは、また実に幼児教育のカリキュラムではないか。